



日下部 元雄

代表取締役



日下部 笑美

共同代表

人の心に関する研究に勤しみ、その成果を多方面に反映することで人々が笑顔で心豊かに過ごせる一助となる

メンタルヘルスや心の問題が人にどのような影響を及ぼすかなどの研究を行っている『オープン・シティー研究所』。その研究成果を企業や自治体、人々の生活といった様々な分野に活かして、より良い社会環境づくりに寄与している。本日は、村野武範氏が日下部社長と、共同代表を務める奥様の笑美さんにお話を伺った。

Company Profile

株式会社オープン・シティー研究所

東京都新宿区市谷砂土原町2-1-4-216

URL : <http://www.opencitynet.org>

— はじめに、「オープン・シティー研究所」さんが取り組まれていることからお聞かせ下さい。

(元) 大まかに言うと「心の健康リスク」についての研究を行っており、それを企業や自治体などに提供することで、より良い経営や社会環境を創り出すサポートをしています。たとえば、村野さんにとって何か嫌なことやつらいことがあった時、その精神状態がご自身のパフォーマンスにも大きく関わってきますよね。特に、最近の研究では、自分で仕事の仕方や中身を決めることができるような自律性がある職場において、職員の創造性が大きく高まること分かってきました。そのため、2年前には「ストレスチェック制度」が導入され、働く人たちのメンタルヘルスを今まで以上に気に懸ける環境が生まれましたが、それだけでは充分ではないのが現状です。そこで私たちは、現状を補完してクライアント企業がさらに発展できるような仕組みづくりなどの研究を進めているのです。

— そちらについて具体的に伺っても？

(元) 先ほど申した通り、企業の創造性を向上するには従業員のメンタルヘルスがと述した「より広い視点からの職場のシステムづくり」ということになり。今伺ったお話の中で、「幼少期や学齢期にあった出来事」というのがありました。それは虐待やいじめなどのことですか？ (元) それもありますが、他には母親または父親との接触が少なかった、集団遊びが苦手だったなど種々の要因があります。私たちはそうした経験をした人が、どのくらい学齢期でいじめにあうか、高校を中退するか、将来貧困になるかなどを数値化する研究も行ってきました。幼少期のメンタルリスクが原因で、どんな問題が起きてくるのかを長くりサーチしてきました。(元) 笑美 女性の社会進出などで、小さいころに母親との接触が少なかった人が増えています。このような経験をした人は他の人とのコミュニケーションがあまりうまく取れず、社会関係の構築に苦労する傾向があります。そして、それがメンタルリスクを抱える人を増やしてしまうことにつながりやすいのと言ったところでもありません。ただ、研究を進める中で忙しい両親の代わりに、地域のネットワーク——近隣の人など周囲のサポートがあれば、リスクの数値が非常に下がるという結果も出ています。私は社会の在り方や仕組みづくりに関する研究に長く携わってきましたが、その観点から見ても驚くほどの数値なんです。より多くの人が、心豊かに生き生きと生きていける社会環境の創出に大きく寄与する研究をされていることが、お二人のお話から理解できました。社会貢献度の高い研究なので、もっとたくさんの人たちに知っていただきたいですね。(元) ありがとうございます。今までは調

でも大切なので、「より広い視点からの職場のシステムづくり」が企業には必要と なってきます。近年、「大卒から3年以内の離職率」についてメディアなどで耳にすることが多くなりましたが、そういったミスマッチや職場不適合を防ぐためには、就労者の幼少期や学齢期の時期にあった課題を解決し、「強み」を身に付けていくことが、非常に重要なことも分かってきました。就労者のストレスは、職場環境や家庭環境、将来への不安、これまでの生い立ちから来る心の健康問題などが複雑に絡み合っ て形成されています。もちろん、これはそれぞれの人生に関わる部分もあるので、その全てを企業が解決できるものではありません。ただ、だからといって就労者自身にメンタルヘルスを一任するのではなく、就労者が本来持っている自分がやりたいこと(内発的動機)を活かしたチャレンジが出来るような職場環境を創ることにより、メンタルリスク低減だけではなく、職場全体の創造性を飛躍的に向上させることが分かってきました。このように職場をトータルかつ柔軟に支援できるシステムを、企業は準備しておく必要があります。それが前

査と研究の段階でしたが、それを経て様々な原因が分かるようになってきたので、これからは心の健康を取り戻すきっかけを皆様に提供していこうと考えております。そのきっかけとなるアプリケーション開発に今注力していて、「創造企業」「創造家族」「創造世代」「創造自治体」「創造公園」「のびのび親子」の6種類があり、それらを「創造人生」の名で統合しています。

— ほう、それは興味深いですね。そのアプリケーションについて、少しお聞かせ願えますか。

(元) たとえば、冒頭でお話しさせていたような仕組みづくりなどを通じて、クライアント企業の事業活動をサポートするプログラムが「創造企業」です。そして、「創造家族」では学齢期の子の自己肯定感を高める支援を行い、「創造世代」では青年期・壮年期の方が自身が真にやりたいことを見つけ、それに合った仕事を探す手助けをしています。「創造自治体」はその名の通り、人々がより心豊かに快適に過ごせる社会環境の創出を手助けする、自治体などに向けたプログラムです。「創造公園」では、子どもからお年寄りまで自分の個性を発見すると共に社会性を伸ばし、遊びを通して学べる場所作りに寄与します。最後の「のびのび親子」では、先ほど妻が話したことからも分かるように、幼少期には親子の「信頼関係の形成」が非常に重要になってきますので、愛着ある親子のふれあいはどういう風に作れば良いのかを伝え、それがうまくいくようにサポートしております。今後は、これらのアプリを通じて、一人でも多くの人の充実した人生を創り出す一助になればと思っています。

適度な距離感を保ちながら子どもの成長を優しく見守る

▼『オープン・シティー研究所』が提供するプログラムの一つ「創造家族」では、学齢期の子の自己肯定感を高める支援を行っている。日下部社長曰く、学齢期で一番注意しなければならないことが勤勉努力や自己肯定感の低下だという。特に親が教育熱心であればあるほど、低くなっていく。子どもが自己肯定感を高めていくには、自分が好きなことを自分で見付けて成功体験を作ることが大事になってきます」と話していた社長。その成功体験が、自信や信念につながっていくという。また、共同代表として社

長を補佐する奥様の笑美さんと、社長が対談で語気を強めて話していたのが、「愛情溢れる良好な親子関係」の重要性。と言うのも、幼少期に親からの愛情をあまり得られなかったり、接する機会が少なかったりした人は、人とコミュニケーションをうまく取れない傾向にあるという。▼社長夫妻にお話を伺い、お二人の豊富な知見に触れる中で、「適度な距離感を保ちながら子どもの成長を優しく見守る」ことが自立心や能動性、豊かなコミュニケーション能力を子どもたちにもたらすという学びを得ることができた。



対談を終え、ゲストインタビューで俳優の村野武範氏と共に記念の一枚

After the interview

「日下部社長のお話は興味深く、どのお話もとても勉強になりました。その中でも特に印象に残ったのが、『教育熱心な親のもとで育った子はニートになっている人が多い』ということ。押し付ける教育が子どもたちを抑制し、内向的にさせてしまうのかもしれない。子どもの自主性を大事にした教育が、より良い親子関係の構築につながり、子どもたちの将来にも大きく関わってくることを知りました」